

長唄

三味線

笛

鼓

大鼓



1

下手

上手

花道

歌舞伎 勸進帳 卜書

富樫… かやうに候ふ者は、加賀の国の住人富樫の左衛門にて候。さ  
 ても頼朝、義経御仲不和とならせ給ふにより、判官殿主従、作り山  
 伏となり下向ある由、鎌倉殿聞こし召し及ばれ、国々へ、かく新関を  
 立てられ、厳しく詮議せよとの厳命によつて、それがしこの関を、  
 うけたまわる。方々左様心得てよからう。

作り山伏…にせの山伏

番卒… 仰せの如く、此程も怪しき山伏を捕らえ、喬木にかけ、並べ  
 おきましてござりまする。随分ものに心得、我々お後に従い、もし  
 山伏と見るならば、御前へ引きすえ申すべし。修験者たるもの、来  
 たりなば、即座に縄かけ討ち取るよう、いずれも警護いたしてござ  
 る。

富樫… いしくも、おのおの申されたり。なかも山伏来たりなば、謀  
 をもつて虜となし、鎌倉殿の御心を安んじ申すべし。方々きつと、  
 番頭つかまつれ。

いしくも(美しくも)…見事に。

番卒… かしこまって候。

※能の「安宅」だと、以下のセリフが入る。

「唄… さて御供の人々には、伊勢の三郎、駿河の次郎、片岡、増尾、常  
 陸坊。弁慶は、先達の姿となりて主従以上十二人」

唄：旅の衣は篠懸すさかけの、旅の衣は篠懸の、露けき袖やしおるらん、

時しも頃は如月の、如月の十日の夜の月の都を立ち出でて。

唄：これやこの 行くも帰るも、別れては、知るも知らぬも 逢

坂の 山隠す霞ぞ 春は、ゆかしける（恨めしき）。波路は

るかに、行く船の 海津の浦に着きけり。

義経： いか、弁慶、道々も申すとおり、かく行く先々に、関所あつ

ては所詮陸奥むつぬへは思いもよらず。名もなきもの手に、かからんよ  
りほど、覚悟はとくより極めたれども、おのおの言葉、もだし難  
く、弁慶が言葉に従い、かく強力ちからと姿を変えたり。面々計ろう旨むねあ  
らむ。

四天王： **さんぞうろう**、帯せし太刀は何のため 一つの世にかは血  
を塗らん。君、おん君おん大事は、今此時。心のほぞを固め、関所  
の番卒斬りたおし、関を破って通るべし。多年の武恩は今日ただい  
ま。出でや、関所を踏み破らん。

弁慶の返答をよむ「さんぞうろう」の音変化

弁慶の返答をよむ「さんぞうろう」の音変化

弁慶： やあれしばらく おん待ち候へ。これは由々しきおん大事に  
て候。この関ひとつ踏み破って越えたりとも、また行く先々の新関  
に、かかる沙汰のあるときは、求めて事を破るの道理。たやすく陸奥むつぬ  
へは参りがたし。それゆえにこそ、袈裟とまん・兜巾とまんをのけられ、笈おしを、

おん肩にまいらせて、君を強力と仕立て候。兎に角にも それがし  
に、おん任せあって、おんいたわしくは候へども、おん傘を深々と  
召され、いかにも草臥くたひれたる体にもてなし、我々より後に引き下が  
って、おん通り候はば、なかなか人は思いもより申すまじ。遙か後  
より、おん入りあるうずるにて候。

義経： 弁慶、よきにはからい候へ。かたがた、違背いはいすべからず。

四天王： かしこまって候。

弁慶： さらば、いずれも、おん通り候へ。

四天王： 心得申して候。

唄： いざ通らんと旅衣 関のこなたに さしかかる。

弁慶： 如何に。これなる山伏の おん関をまかり通り候。

番卒： なに、山伏の、この関へかかりしとな。

富樫： 何と、山伏のおん通りあると申すか。心得である。

富樫： のうのう客僧たち、これは関にて候。

弁慶： うけたまわり候。これは南都東大寺建立のため、国々へ客僧を遣わされ、北陸道は、この客僧うけたまわって、まかり通り候。

富樫： 近頃殊勝には候へども、この新聞は、山伏たるもの限り、固く、通路なりがたし。

弁慶： 心得ぬ事どもかな。して、その所為は。

富樫： さん候。頼朝、義経、おん仲不和とならせ給ふにより、判官殿主従、奥秀衡を頼み下向なる由、鎌倉殿、聞こし召しわかれ、厳しく詮議せよとの厳命によつて、それがし、この関をうけたまわる。

番卒： 山伏を詮議せよとの事にて、我々、番頭つかまつる。ことに、見れば、大勢の山伏たち、一人も通すこと、まかりならぬ。

弁慶： 委細、うけたまわり候。それは、作り山伏をこそ留めよとの、仰せなるべし。真の山伏を留めよ、との仰せにては候まじ。

番卒： いや、昨日も山伏、三人まで斬つたる上は、たとえ真の山伏たつとも、容赦はならぬ。たつて通りば、一命にも及ぶべし。

弁慶： さて、その斬つたる山伏首は、判官殿か。

富樫： ああら、むずかしや。問答無用。一人も通すことまかりならぬ。

弁慶： 言語道断。かかる不祥のあるべきや。この上は力およばず。さらば最期の勤めをなし、尋常に誅せられうづるにて候。かたがた、近う、わたり候へ。

四天王： 心得て候。

弁慶： いでいで、最後の勤めをなさん。

唄： それ、山伏といつば、役の優婆塞の行義を受け、即心即仏の本体をここに打ち止め給わんこと、明王の照覧はかり難う。熊野権現の御罰当たらんこと、たちどころに、おいて、疑いあるべからず。唵阿毘羅吽欠と数珠さらさらと押しもんだり。

富樫： ちかごろ殊勝の、おん覚悟。先に、うけたまわり候へば、南都東大寺の勧進と、仰せありしが、勧進帳こそ持なき事は、あらじ。勧進帳を、遊ばされ候へ。これにて、聴聞つかまつらん。

弁慶： 何と、勧進帳を読めと、仰せ候や。

富樫： いかにも。

弁慶： 心得て候。

唄： もとより、勸進帳のあらばこそ。笈の内より往来の、巻物一巻取りいだし、勸進帳と名付けつつ、高らかにこそ、読み上げられ。

弁慶： それ、つらつら、惟ん見れば。大恩教主の、秋の月は、涅槃の雲に隠れ、生死長夜の長き夢、驚かすべき人もなし。ここに中頃、帝おはします。おん名を聖武皇帝と申し奉る。最愛の夫人に別れ、恋慕の思いやみがたく、涕泣眼に荒く、涙玉を貫ねつらね、乾くいとまなし。故に、上下菩提のため、廬遮那仏を、建立し給う。しかるに、去んじ治承の頃、焼亡しおわんぬ。かかる霊場絶えなむことを嘆き、俊乘房重源、勅命をこらむつて、無常の関門に涙を流し、上下の真俗を勧めて、かの霊場を再建せんと諸国勸進す。一紙半銭、奉財の輩は現世には無比の樂に誇り、当来には、数千蓮華の上に坐す。帰命稽首敬つてもうす。

唄： 天も響けと、読み上げたり。

富樫： 勸進帳、聴聞の上は、疑いは、あるべからず。さりながら、

事のついでに、問い申さん。世に、仏徒の姿様々あり。中にも山伏は、いかめしき姿にて、仏門修行はいぶかしし。これにも、いわれあるや、いかに。

弁慶： おお、その来由いと易し。それ、修験の法と言っぱ、胎蔵、金剛の両部を旨とし、険山悪所を踏み開き、世に害をなす悪獣毒蛇を退治して、現世愛民の、慈眼を垂れ、あるいは難行苦行の功を積み、悪霊亡魂を、成仏得脱させ、日月星明、天下泰平の祈禱を修す。さるが故に、内には、慈悲の徳を修め、表に、降魔の相を顕し、悪鬼外道を、威伏せり。これ、神仏の両部にして、百八の数珠に、仏道の利益を顕す。

富樫： してまた、袈裟衣を身にまとひ、仏徒の姿にありながら、額にいただく兜巾はいかに。

弁慶： すなわち兜巾篠懸は、武士の甲冑にひとしく、腰には弥陀の利剣を帯し、手には釈迦の金剛杖にて、大地を突いて踏み開き、高山絶所を縦横せり。

富樫： 寺僧は錫杖をたずさるるに、山伏修験の、金剛杖に五体を固むる謂れは何と。

弁慶： 聞くもおろかや。金剛杖は、天竺壇特山の、神人、阿羅々仙人の持ちたまひし霊杖にて、胎蔵、金剛の功德を籠めり。釈尊、い

まだ、鬘沙彌くわんしゃみと申せしおり、阿羅々仙あらかせんに給仕して苦行したまい、  
やゆ功積こうせきもり、仙人せんじん、その信力強勢しんりきじょうせいを感じ、鬘沙彌くわんしゃみを改め、照普比しょうぷひ  
丘かみと名づけたり。

富樫： してまた修験に伝わりしは。

弁慶： 阿羅々仙あらかせんよりの照普比丘しょうぷひかみへ伝わる金剛杖、かかる靈杖りやうじょうなれば、  
わが宗祖そうそ役やくの小角せうかく、これを持って山野を跋涉し、これより世々に、  
これを伝う。

富樫： 仏門ぶつもんにありながら帯せし太刀は、ただ、もの脅おそさん料りやうなるや、  
まことに害がいせん料りやうなるや。

弁慶： これぞ、案山子あんざんこの弓矢ゆみやに似たれど、脅おそしに佩はくの料りやうならず。  
仏法ぶつぽう、王法おうぽうに害がいをなす、悪獸毒蛇あくじゆどくさは言うにおよばず。例れいわば、人間にんげん  
なればとて、世をさまたげ、仏法ぶつぽう、王法おうぽうに敵てきする悪徒あくとは、一殺多生いつせつたじゆ  
の理りによつて、ただちに、斬きつて捨すつるべし。

富樫： 目にさえぎり、形あるものは、斬きり給たまうべきが、もし無形むけいの  
陰鬼陽魔いんきやうま、仏法ぶつぽう、王法おうぽうに障しょう碍がいをなさば、何をもつて斬きり給たまうや。

弁慶： 無形の陰鬼いんき、陽魔やうま、亡靈むらうりやうは、九字真言くじしんげんを持って、これを切断せつだんせ  
んと、何の難なんきことやあらむ。

富樫： してまた、山伏さんぶつの、いでたちは。

弁慶： すなわち、その身を 不動明王ふどうめいおうの尊形そんけいに象かたじるなり。

富樫： 額かぶたかに戴かく兜巾かぶとはいかに

弁慶： これぞ、五知ごちの宝冠ほうくわんにて、十二因縁じふにいんげんの、ひだを取とつて、これ  
を戴かく。

富樫： かけたる、袈裟けさは。

弁慶： 九会曼荼羅くゑまんだらの、柿かきの篠懸すずかけ。

富樫： 足あしにまといし、はばきは、いかに。

弁慶： 胎藏黑色たいざうこくしきの、はばきと称なづす。

富樫： してまた、八はちつの草鞋わらじは。

弁慶： 八葉はちようの蓮華れんげを踏ふむの心こころなり。

富樫： いで入いる息いきは。

弁慶： 阿吽あうんの二字。

富樫： そもそも、九字真言とは、いかなる儀にや。このついでに、  
問ひ申せん。やむ、何と何と。

弁慶： 九字の大事は、深秘にして、語り難きことなれども、疑念を  
はらさん、そのために説き聞かせ申すべし。それ、九字真言と言っ  
ば、臨兵闘者皆陣列在前の九字なり。まさに切らんとす時は、ま  
ず、正しく立って、齒を叩くこと、三十六度。次に、右の五指をも  
って、四縦をえがき、のちに五横を書く。そのとき、急々如律令と、  
呪するときは、あらゆる五陰鬼、煩惱鬼、まった、悪魔、外道、死  
霊、生霊、たちどころに滅ぶる事、霜に煮え湯を、注ぐが如し。  
げに、元本の無明を斬るの、大利剣。莫耶が剣も、なんぞ如かん。  
まだこの上にも、修験の道疑いあらば、尋ねに応じ答え申さん。が、  
その道広大無量なり。肝に彫り付け、人にな語りそ。あなかしこ、  
あなかしこ。

大日本の神祇、諸仏菩薩も照あれ。百拝稽首、畏み畏み謹んで申す  
と云々、かくの通り。

唄： 関心してぞ見えにける。

富樫： かかる尊き客僧を しばしも疑いしは 我があやまり。今よ  
りそれがし勸進の施主につかん。それ、布施物持て。

番卒： ははあ

唄： 士卒が運び、広台に 白綾袴ひと重ね。加賀絹あまた、取り  
そろえ、御前へこそは直しけれ。

富樫： 近頃、些少には候へども、それがしが功德、なにとぞ、ご受  
下さらば。ひとえに願ひ奉る。

弁慶： こは、ありがたの 大檀那。現当二世安楽ぞ。何の疑いかあ  
るべからず。重ねて申す事の候。なお我々は、近国を勸進し、卯月  
半ばに、上るべし。それまでは、かさ高の品々お預け申す。

弁慶： さらばいずれも、おん通り候え。

四天王： 心得て候

弁慶： いでいで、急ぎ申すべし。

四天王： 心得申して候。

唄： こは嬉しやと山伏も、しずしず立って歩まれけり。

富樫： いかに、それなる強力、止まれとこそ。

唄： すわや、我が君を怪しむるは一期の浮沈ことなりと、おのお

の、後に立ち帰る。

弁慶： あいやしばらく。あわてて事を仕損ずな。

ここな、強力め、何とて通りおらぬぞ。

富樫： それは、此方より留め申した。

弁慶： それは何とて、おん留め候ふぞ。

富樫： あの強力が、ちと人に似たると申す者の候うゆえに、さてこそ、ただいま留めたり。

弁慶： なに、人が人に似たるとは珍しからぬ、仰せにこそ。さて、誰に似て候ふぞ。

富樫： 判官殿に似たると申す者の候ふほどに、落居の間留め申した。

弁慶： なに、判官殿に似たる、強力めは。一期の思い出な。腹立ちや、日高くは能登の国まで越えさうするわと、思いおるに、わずかな筈ひとつ背負うて、後へ下ればこそ、人も怪しむれ。総じて此程より、判官殿よと怪しめらるるは、おのれが業のつたなき故なり。思えば、こつくし、憎し、憎し。いで物見せん。

唄： 金剛杖をおっ取って、散々に打擲す。

弁慶： 通れ。

唄： 通れとこそは、ののしりぬ。

富樫： いか様に、陳ずるとも、通すこと、

番卒： まかりならぬ。

四天王： や、筈に目をかけ給ふは、盗人ぞな。

弁慶： こうれ。

唄： 方々は何ゆえに、かほど賤しき強力を、太刀、刀を抜き給ふは、目垂れ顔の振舞か。臆病の至りかと。みな山伏は、打刀抜きかけて。勇みかかれる有様は、いかなる天魔鬼神も、恐れつべうぞ、見えにける。

唄： まだこの上も、おん疑い候はば、この強力、荷物の布施物もるともに、おあずけ申す。いかようにも究明あれ。ただし、これにて、打ち殺し、見せ申さんや

富樫： いや、先達の、荒けなし。

かたじけのう思ゆるぞ。

弁慶： しからば、ただ今、おん疑いありしは いかじ。

富樫： 士卒のものの 我への、訴え。

弁慶： おお、疑念晴らし、打ち殺し、見せ申さん。

富樫： いや、誤まりたもうな。番卒どもが、よしなきひが目より、

判官殿にもなき人を、疑えばこそかく折檻もし給うなれ。今は疑い晴れ申した。とくとくいざない、通られよ。

弁慶： 大檀那のおおせなくんば、打ち殺して捨てんずもの。命、冥加にかないしやつ。以後はきつと、つつしみおろう。

富樫： 我はこれより、なおも厳しく警護の役。方々来たれ。

番卒： ははあ

唄： 士卒を引き連れ、関守は、門の内へぞ、入りにける。

義経： さても、今日の機転うまいか、さらに凡慮のおよぶべきところところに、あらず。とかくの是非をあらそわずして、ただ下人のごとく散々に、我を打って助けしは、まさに天の加護。弓矢正八幡の神慮と思えば

四天王王： この常陸坊をはじめとして、従うものども、関守に、呼

び止められしその時は、こそ君のおん大事、と思いつて、

四天王： まこと、源氏の氏神正八幡ついでの、我が君を守らせ給うおんしるし。陸奥下向は速やかなるべし。

四天王： これまったく武蔵坊の、智謀によらずんば、まぬがれ難し。なかなかもって、我々が及ぶべきところにあらず。ほほう、驚きいつて候。

弁慶： それ、時は末世に及ぶと云えども、日月ひびいまだ地に落ちたまわす。ご幸運、ははあありがたし、ありがたし。計略せんぎゃくとは申しながら、まさしき主君を打擲。天罰、空恐ろしく千鈞せんきんも上ぐる、それがし腕も痺るるごとく覚え候。はああ、もったいなや、もったいなや。

唄： ついに泣かぬ弁慶の、一期の涙ぞ殊勝なる。判官、おん手を、取り給い

義経： いかなればこそ、義経は弓馬の家に生まれ来て、かくまで、武運つたなきぞ。命は兄頼朝にたてまつり、屍は西海の波に沈め、



弁慶： 山野海岸に起き伏し、明かす、武士の。

唄： 鎧に沿いし袖枕。片敷く隙も波の上。ある時は舟にうかび、風波に身を任せ。またある時は、山背の馬蹄も見えぬ雪の中に、海少しある夕波の、立ちへる音や、須磨明石。とかく、三年の程も、なぐなく、いたわしやと、しおれかからし鬼あざみ、露に霜おく、ばかりなり。

弁慶： とへ、とへ、退散。

唄： 互いに、袖を引きつれて、いざ立て給えの、折からに。

富樫： のうのう、客僧たち、しばし、しばし。

さても、それがし、あまりに率爾を申せしゆえ、粗酒ひとつ進せん、と、持参せり。いざいで、杯まいらせん。

弁慶： あら、ありがたの、大檀那。ごちそう頂戴つかまつる。

唄： げにげにこれも心得たり。人の情の益を、受けて心をとどむとかや。今は昔の 語り草。あら恥ずかしの我が心。一度まみえし女さえ、迷いの道の関越えて、今またここに越えかぬる。人目の関の、やるせなや。ああ悟られぬこそ、浮世なれ。

唄： おもしろや、山水に。おもしろや山水に。盃を浮かへては、流に引かざる曲水の、手まずさへぎる袖ふれて、いざや舞を舞はうよ。

弁慶： 先達、お酌にまいって候。

富樫： 先達、ひと差しおん舞い候入。

弁慶： (唄) 万歳ましませ巖の上 万歳ましませ巖の上。亀は棲むなり。あろうとんどう。

唄： もとより弁慶は、三塔の遊僧。舞、延年の時の、若。

弁慶： (唄) これなる、山水の 落ちて巖に響くこそ。

唄： これなる、山水の 落ちて巖に響くこそ。鳴るは瀧の水、鳴るは瀧の水。

唄： 日は照るとも絶えずとつたり。とくなく立てや。手束弓の、心許すな。関守の人々。暇申してさらばよとて。笈をおっ取り、肩に打ち懸け。

虎の尾を踏み、毒蛇の口をのがれたる心地して、陸奥の国入ぞ下すける。